

経尿道的前立腺核出術における逆行性一塊核出法の有効性について

済生会新潟第二病院 泌尿器科

車田茂徳、吉水 敦

前立腺肥大症に対する手術療法として、経尿道的前立腺核出術の有効性については多くの報告がなされている。その代表的な手技であるホルミウムレーザー前立腺切除術（HoLEP）については、その有効性が広く認識されてはいるが、経尿道的前立腺切除術（TUR-P）を凌駕するには至っていない。最も大きな理由は、初期の設備投資が高額であることと考えられるが、標準とされている手技が、少し煩雑で、習熟に多くの症例数を要することもその一つと考えられる。また、初期症例に重度の尿失禁を経験したとの報告が散見され、これも理由の一つと思われる。我々が行っている術式は前立腺尖部で腺腫を全周性に剥離し、その剥離層を膀胱頸部までつなげることで、腺腫を一塊として核出することができる。途中で腺腫に切り込む必要がなく、最小限の剥離面での核出が可能であるため、手技の煩雑さも軽減される。尖部の剥離については、TUR-Pの手技になれた術者であれば特に違和感無く取り組めると考えている。当院では、この術式で1300例以上の手術症例を経験しているが、長期の尿失禁はほとんど経験していない。使用する手術器具が多くなるため、この点の煩雑さは否めないが、逆に、様々なデバイスを使用した核出術への応用も可能であると考えている。当院で行っている術式の概要、コツについて紹介したい。